

目次

伊勢のお木曳き.....	2
令和七年度神宮大麻暦頒布始奉告祭並びに講演会.....	4
神道政治連盟埼玉県本部 「時局研修会(憲法研修会)」報告.....	5
埼玉県神道青年会活動報告.....	6
令和七年度「教養研修会」開催のお知らせ.....	7
第七十一回伊勢神宮新穀感謝祭 「埼玉県神社庁参宮団」報告.....	8
埼玉県神社庁新嘗祭.....	8
庁務日誌抄.....	9
告知「神主さんと神社を学ぼう!」について.....	9
本宗奉賛委員会 埼玉東支部事業報告.....	10



第255号

発行 埼玉県神社庁
さいたま市大宮区高鼻町1-447-1
電話 048(643)3542

編集 庁報室
印刷 株式会社アサヒコミュニケーションズ



第六十二回神宮式年遷宮 御木曳行事 内宮川曳

伊勢のお木曳き

濱千代 早由美

一、遷宮が始まる

令和七年五月に山口祭、木本祭このもとまつりが執り行われ、「第六十三回神宮式年遷宮」が令和十五年秋の遷御うつりの儀に向けて動き出した。

二十年に一度の神宮の式年遷宮は、社殿の造営、御装束神宝の新調奉獻、新宮にいみやに神儀を遷す遷御からなる大事業で、膨大な資材のうち御用材だけ見ても、樹齢二百から三百年以上の檜が一万本必要となる。

御用材を伐り出すに当たっては、御杣山の山の口で山口祭(令和七年五月二日)を行い、伐採と搬出の安全が祈られた。御杣山とは御用材を伐り出す山のことである。御用材は、元来、内宮背後の神路山、外宮背後の高倉山から調達されてきたが、これらの山の木は式年遷宮だけでなく伊勢の町の居住者や参拝者の煮炊きのためにも伐採され、長期にわたって使用されるうちに、資源の枯渇も危ぶまれるようになった。さらに遷宮行事そのものの大規模化により、御用材の調達を神宮宮域林だけに頼れなくなった。そこで、江戸時代になると、紀州などの山々のほか、尾張藩領の木曾(長野県・岐阜県)の山々が御杣山として定められた。御正殿の心御柱の御用材を伐採するにあたって行われる木本祭は、現在でも神路山、高倉山の山麓で行われる。

さて、第六十三回の遷宮で使われる御用材は、令和七年六月に木曾の御杣山で行なわれた御杣始祭みそまはまつりをもって正式に伐り始められた。最初に伐採されるのは御神体をお納めする御器を奉製するための御樋代木で、御杣山の山中で左右に並ぶ二本の檜が「三ツ緒伐り」で伐り倒された。

御用材は、道中、各所の神社などに泊まりつつ、陸路送り届けられる。伊勢に到着した御樋代木は、内宮は六月九日、外宮は六月十日の御樋代木奉曳式で、それぞれの五丈殿前に曳き入れられた。この後、木曾の山で伐採された御用材も伊勢に届けられ、いよいよ令和八年四月の御木曳初式から、伊勢のお木曳き行事が始まる。御木曳初式では両正宮や別宮の棟持柱にあてられる役木やくぎを曳き込むため、「役木曳き」とも呼ばれる。役木曳きで曳かれた用材は、用材加工開始の儀礼である木造始祭こづくりはまつりに使用される。

二、誰が曳くか、どのように曳くか

お木曳きとは、シンブルに言ってしまうえば「新宮の御用材を運搬する」行事で、どのような人が運搬を担うのかは時代により変化してきた。労働として木を曳くのか、それとも発意のもとに奉納するのかなど、その意味も変化してきた。国の「記録作成等の措置を講

ずべき無形の民俗文化財」として選択され、伊勢市の「無形民俗文化財」として指定されている民俗文化財でもある。

ともあれ、現在のお木曳き、遷御の直前に行われるお白石持ちは、神宮の式年遷宮に伊勢の人々が唯一関わることの出来る行事である。神領地を近世以来の郷や村の区分を踏襲して分けた単位が自治会の範囲にほぼ重なっているのが、奉曳団は多くの場合、自治会を基礎として組織される。第六十二回のお木曳きでは七十六の奉曳団が結成されたが、令和最初に行われる第六十三回のお木曳きで結成されるのは七十二の奉曳団だという。地域のくらしが変わっていく中で、「今まで通り」に祭事を行うことの困難を抱えているのは、伊勢の町も同様である。

旧内宮領と旧外宮領では、御用材やお白石の奉納方法が異なる。旧内宮領のお木曳きは、櫓に御用材を積んで奉曳する川曳きで、川の中を曳いていく迫力が身上である。櫓や轆おを立てる程度であった御用材への飾り付けは、第六十一回のお木曳き頃より、鳥居をたてたりする団も出てきた。御用材を載せた櫓が五十鈴川を曳かれて行く様子は、五十鈴川にかかる橋の上から見たところだが、橋の下を通過する場合は、一時橋上の往来が遮断されるので注意されたし。

旧外宮領は各奉曳団が所有する奉曳車(お木曳き車)での陸曳きで行う。奉曳車は普段は分解してそれぞれの地域の倉庫に格納されているため、本番前に組み立てて、試曳ちひきや

曳き初め式などを行って入念に調整を行う。奉曳(本曳き)の前日夕方には、奉曳車にさまざまな装飾を施し、提灯を灯し、踊り、太鼓などでにぎやかに出発地点まで車を曳いていく団もある(上せ車)。

当日はそれぞれの団に受け継がれた技術を駆使して荷積みし、趣向を凝らした飾りつけを施す。奉曳は道中木遣りや踊りなどを披露しながら進行するが、二本の綱同士をぶつけ、押し合ったり(綱振り)、木遣り子を綱で挟んで抱え上げたり(木遣り上げ)というような遊びを入れながら進められる。外宮北御門へ入る最後では、木遣りが歌い終わるのを合図に、曳き手も一緒に「エンヤ、エンヤ」の掛け声とともに、走りながら一気に曳き込んでいく(エンヤ曳き)。

三、お木曳きの「音」

お木曳きを伊勢で体験する機会があれば、お木曳きの「音」も楽しんで欲しい。陸曳きの最後で行われるエンヤ曳きもその一つである。ただしエンヤ曳きのような曳き方は危険を伴うので、町の奉曳でしか見ることは出来ない。

大勢の人が力を合わせて何かを行うときには、危険を回避するためにも合図が必要である。その一つが木遣りである。御用材が切り出されて神宮に納められるまでの諸段階では、木遣りが歌われてきた。伊勢の木遣りは、御用材が伊勢に運ばれて来てからの運搬作業にともなう掛け声的な性格を持つものだった

が、お木曳き行事に祭礼的要素が強くなってくると、そこで歌われる木遣りも単なる作業時の掛け声ではなくなっており、芸能的要素が加味されるようになった。

特に陸曳きの木遣りは種類が多く、本木遣り、水揚げ木遣り、松前木遣り等に細分化されている。どのような場面でも何が歌われるのかに気を付けてみるのもお木曳きの楽しみの一つである。川曳きの木遣りは陸曳きに比べるとシンプルで、同じ節のものを歌詞をかえて繰り返し歌うことが多い。また、木遣りを歌う木遣り子が手に持っているものにも是非注目して欲しい。木を削ったものや紙を折ったものを束ねて柄の先に付けたザイ(采)、紙を幣帛のように折ったヘイ(幣)、木遣りを歌う時に持つものは奉曳団ごとに異なっている。陸曳きでは、ザイやヘイで道を叩く音が聞こえてくるかもしれない。

陸曳きでは、木遣りにまじって、奉曳車の車輪と心棒からきしみ音が聞こえてくる。これは「枕鳴り」と呼ばれている。試し曳きで調整する重要な要素の一つで、それぞれの町の「いい音」のためには、それぞれ秘策がある。町によってコツが全く違うものも興味深い。団によっては、エンヤ曳きのために心棒を太くしてあるために枕鳴りを鳴らさない団もある。

木遣りも枕鳴りも、みな「ウチの音が一番」という自負のもとに入念な準備を進めている。伊勢でお木曳きを体験する機会があれば、是非とも生で体感していただきたい。

もう一つの音は、自然から発せられる音である。第六十三回は山口祭でも御杣始祭でも御榎木奉曳でも雨の音が聞こえた。天気によって変わる音、五十鈴川の川の音など、自然の音もお木曳きの音である。

四、祭祀と技術と祝祭

もう一度おさらいすると、神宮の式年遷宮は、社殿の造営、御装束神宝の新調奉獻、遷御からなる大事業である。神宮の祭祀、造営や御装束神宝の新調にあたっての技術が神宮の重要課題とするなら、お木曳きやお白石持ちといった祝祭を安全に、賑やかに、華やかに行なうことは伊勢の人々にとっての重要課題である。伊勢の人々は、八年かけて行われる神宮の式年遷宮のうち、ほんの数日間には様々な工夫や技術を投入する。

各奉曳団では、車係、梃子係、綱係、木遣り係は重視される。特別な技術が必要だからである。いい音で枕鳴りを鳴らす技術、木遣りの技術だけではない。「木の扱い」についての知恵の継承、事故を防ぎ、円滑な奉曳を行うためには、綱係や警護係、進行係の知恵も重要で、これらには日々のコミュニケーションのあり方も反映される。伊勢の町は、二十年に一度の式年遷宮のたびに、技術や地域のあり方などについての自己点検を繰り返して、工夫を重ねてきたのである。

(大阪人間科学大学特任教授)

令和七年度神宮大麻暦頒布始奉告祭並びに講演会

鈴木敬臣

十月三日、神社庁を会場に神宮大麻暦頒布始奉告祭の斎行並びに講演会が開催され、県内神職及び県総代会役員六十六名が参加した。これに先立ち、神社庁役員会・本宗奉賛委員会が行われ、神宮大麻暦の請求数や本宗奉賛委員会常任委員会の取り組みについて報告された。

その後、午後三時より神宮大麻暦頒布始奉告祭が北足立支部奉仕により斎行され、高麗文康庁長、大野隆司県神社総代会会長、神宮大宮司御名代石垣仁久神宮禰宜が玉串を奉り



神宮大麻暦頒布始奉告祭

て拝礼した。最後に、祭壇より神宮大麻暦が撤され、斎主から高麗庁長に授与、次に高麗庁長から頒布奉仕者代表の中村邦彦さまにたま支部支部長に授与された。引き続き、神宮大麻暦頒布表彰授与式を執り行い、それぞれ表彰者に対し石垣神宮禰宜より表彰状並びに記念品が授与され、ご祝辞を賜った。

次に、本宗奉賛委員会常任委員会活動報告として馬場裕彦本宗奉賛委員長より、今年度取り組んで頂いた支部主催の事業と神社庁で取り組んだ事業について説明した後、今後の



濱千代先生

予定について述べられた。

その後の講演会では、講師に大阪人間科学大学特任教授の濱千代早由美先生をお招きし「地域社会の中の神宮」伊勢のお木曳き「遷宮がはじまる」と題して講演いただいた。ご自身が二見町の出身であり、地元住民が遷宮に関わることができる唯一の行事がお木曳きである為、それぞれの町会で入念な準備をしていることなどを紹介いただいた。

【奉仕員】

斎主	調神社宮司	吉田 正臣
祭員	氷川八幡神社宮司	石山 貴宣
祭員	川口神社宮司	竹本 佳標
祭員	中山神社権禰宜	吉田 幸子

神宮大麻暦頒布表彰

頒布優良支部

さきたま支部

頒布特別優良従事者

北足立支部	調神社宮司	吉田 正臣殿
-------	-------	--------

頒布優良奉仕者

入間西支部	白鬚神社宮司	宮本 剛義殿
秩父支部	棕神社禰宜	星田憲二郎殿
さきたま支部	行田八幡神社宮司	松岡 宏聡殿
埼玉東支部	鷲香取神社宮司	矢島 廣治殿

(神社庁主事補)

神道政治連盟埼玉県本部 「時局研修会（憲法研修会）」報告

茂木 貞佳

十月二十七日、時局研修会が神社庁を会場として、県内神職・総代四十一名参加のもと開催された。令和五年度より継続の憲法研修会として、引き続き安全保障環境の課題と対策を学び、また皇室、皇統の重要性について認識を深める機会として実施された。講師には前参議院議員の佐藤正久先生、ジャーナリストの葛城奈海先生の両名をお招きした。

第一講は、「我が国の安全保障環境について」と題し佐藤先生に講演いただいた。

陸上自衛官として約二十五年勤務され、更に国会議員として外交・防衛を担当された経験を踏まえ、自衛隊の国防任務や、災害派遣、国際協力を担う海外派遣などの活動を紹介された。

次に、自衛官目線から見た政治や憲法の



佐藤先生

在り方、処遇改善について意見を述べられると共に、我が国を取り巻く諸外国との緊張関係や、最先端技術による軍事力や戦略の変化について解説された。

第二講は、「戦後八十年、日本を守るとは」と題し葛城先生に講演いただいた。

ジャーナリストであり、また「一般社団法人 防人と歩む会」、「一般社団法人 皇統を守る会」の会長を務め、「予備役ブルーリボンの会」幹事長として多岐に亘る活動に取り組まれている。

先生は、稲作をきっかけに日本の文化や伝統の素晴らしさに気づきを得て、天皇の祈りと君民一体の歴史を学び、自ら国を守る意識に目覚めたことを披露された。

現在の皇統の危機に関しては、GHQの占領政策が源であることを指摘された。そ



葛城先生

して令和六年に国連の女子差別撤廃委員会から日本政府が受けた皇室典範の改正に関する勧告に対しては、皇統を守る会としてスィスジュネーブにて開催された同委員会へ出席し、日本の皇統と国体について正しい理解を求めるスピーチや活動を行ったことを紹介された。

更に多岐に亘る活動事例として、北朝鮮による拉致問題解決への取り組みや、台湾有事に備えを期す国境の与那国島と自衛隊の活動などを解説された上で、八紘為宇の精神で繋がる先人への慰霊と感謝の重要性を述べられた。

(神社庁主事)



会場の様子

埼玉県神道青年会活動報告

松岡 宏聡

神道青年会は、神道精神の研鑽と時代を担う青年神職の資質向上を目的に、各種研修並びに時局に即した事業を展開してまいりました。本年度は特に、大東亜戦争終結八十年という節目を迎えるにあたり、戦没者の慰霊顕彰と平和の祈りを柱とした諸事業に重点を置いて活動を行いました。

勉強会

先ず、令和七年七月五日、埼玉県神社庁会場で勉強会を開催しました。「戦争のない世界へ」平和を紡ぐ記憶と感謝の継承」をテーマに県内神職とその家族、子弟を対象に三十三名が参加しました。

終戦八十年を迎え、戦争体験者の減少が進んでいる中、戦争を知らない我々青年神職がどのように

次の世代に繋いでいくかが課題であります。

講演では一般財団法人埼玉県遺族連合会の福居一夫副会長より「私が子供の時経験した戦争」、岩淵順子事



埼玉県護国神社

務局長より「戦争が起こるとどうなるの」と題したご講演をいただき、戦争の悲惨さや平和の尊さを改めて思い知る機会となりました。その後、参加者は国や家族の為に命を捧げた英霊に対し、感謝の想いをそれぞれ手紙にしたため、心を込めて千羽鶴を折った後、埼玉県護国神社に奉納し、正式参拝を行いました。

練成研修会

令和七年九月五日、長瀬町の寶登山神社（曾根原正宏宮司）に於いて第四十五回練成研修会を開催しました。

当日は台風十五号の影響で朝から大雨が降りしきる中、一時は開催が危ぶまれましたが、二十一名の参加をえました。午前中の研修では後段に述べる沖縄県での慰霊祭に向けて「沖縄戦とその実相―地上戦を中心に―」と題し、防衛省防衛研究所戦史研究センター資料室所員の齋藤達志先生をお招きして講演を行いました。その中で当時の日本軍の目線から戦いに

至った背景や作戦の展開、同時に現地住民の動向も併せて知ることができました。午後からは、神社庁神道行道彦の朝日則安先生と田所常典先



境内での鳥船行事

生の指導の下、鳥船行事と鎮魂を行いました。大雨の為例年行っている神社近郊の荒川に入つての禊は中止とし、今回境内で行なつた鳥船行事は降り頻る雨の中となりました。

英霊顕彰事業

令和七年十月六日より八日迄の日程で、沖縄県「埼玉の塔」慰霊祭並びに遺骨収集事業を、二十五名参加の下実施しました。沖縄県での慰霊祭は平成二十五年以来となります。初日は、那覇空港に到着後すぐに糸満市摩文仁の丘に建立されている「埼玉の塔」にて慰霊祭並びに平和祈願祭を斎行しました。この塔には埼玉県出身で沖縄戦並びに南方諸地域において散華された英霊二万八千三十一柱が祀られており、埼玉の塔管理委員会が管理されております。

斎主は渡邊昌紀副会長が務め、副斎主は福田大輝理事、祭員は檜森恭司会員、伶人は鳳笙を前原一也副会長、箏箏を金子恵介理事、龍笛を宮本晃平理事、典儀は嶺崇紀理事の七名にて奉仕しました。また、来賓として大山晋吾沖縄県神社庁長と高良奈緒矢沖縄県神道青年会会長に参列を賜りました。祭詞の中では、護国の英霊たちが厳しい環境の中で大国を相手に最期まで戦い抜いた功績をたたえました。そして八十年という時間が経ち若い世代を中心に英霊たちの功績を知らずに過ごしていることへの嘆き、またその人々へ神職たる我々が教え伝えていく誓いを奏上しました。その後「海行かば」奉奏、斎主玉串拝礼に続き、松岡宏聡会長、大山庁長、高良会長、歴代会長として第十六代吉田正臣会長、第二十七代鈴木智之会長、第二十八代高橋陽一会長、県内神職代表として秩父神社

蘭田建宮司に玉串を奉り拝礼を頂きました。最後に馬場裕一副会長の先導による聖寿万歳を一同で奉唱し祭典を終りました。

翌日は、NPO法人JYMA日本青年遺骨収集団の協力のもと、糸満市荒崎海岸にて当会初の試みとなる遺骨収集事業を実施しました。

現場はアダンやソテツが繁る鬱蒼たる林の中で蒸し暑く、足元は米軍の艦砲射撃によって砕け散った琉球石灰岩の岩肌が鋭く露出し、立っているのも儘ならない過酷な環境でした。

初めにJYMAの学生らの指導のもと、作業対象の地へ向かって拝礼してから始まりました。作業に支障のある木や枝を切り落としてから、ようやく地面の掘削に取り掛かりました。蒸し暑さと重労働で体中から汗が噴き出し、持参した飲料水も底を尽きかけました。そんな過酷な状況でも当会の参加者は誰も弱音を吐かず、約六時間黙々と作業を行いました。そんな中、岩の隙間から子供とみられる御遺骨を収集することが出来

ました。その御遺骨は黒く焼け、当時の惨状を静かに物語っており、胸が締め付けられ、自然と涙が溢れ出てきました。発見した御霊に對し心より哀悼の意を



慰霊祭

捧げるため最後に作業対象地に向かって拝礼し、遺骨収集事業を終りました。尚、収集することが出来た御遺骨は厚生労働省戦没者遺骨鑑定センターが鑑定し、遺族や家族に返還されます。

広報活動

当会事業発信部では会報「溪流」の発行、令和七年五月より『SSSトリプルエスⅠ』のメールマガジン化、SNSでの積極的な情報発信に力を注いでおります。

今年度は、大東亜戦争終結八十年の節目にあたり、『埼玉県の忠魂碑』に掲載されている忠魂碑を紹介しております。特にその碑文には、建立された経緯や当時の人々の英霊に對する思いが刻まれております。他にも当会の活動を多くの方々に素早くお届けできるように努めて参りますので、県内神職の皆様にもご覧いただければ幸甚です。

(埼玉県神道青年会会長)



遺骨収集事業

令和七年度「教養研修会」開催のお知らせ

期 日 令和八年三月十三日(金・先勝)

研修主題 「初心者向けのAI基礎知識」

副 題 「AIと神社のこれから」

開催趣旨

「AI(人工知能)」という言葉を目にする機会が増えましたが、「神社とは縁遠い」と思われていないでしょうか。

少子高齢化による奉職者の減少が深刻化する中、斯界ではその活用価値を見出そうと模索を始めつつあります。事務作業や情報発信の一部をAIに任せることで、神職の責務である「祭祀」や「参拝者との対話」に注力することが可能になるかもしれません。本研修会では、「初心者向けのAI基礎知識」を主題としつつ、単なる技術習得に留まらず「AIと神社のこれから」を共に考える場といたします。

SNSでの情報発信における活用法や、生成物にまつわる著作権の問題など、利用する側の正しい知識を持つ向き合うことが不可欠とされます。講師には、AI技術の最前線を知る専門企業ミツイワ株式会社から、中村先生を、そしてAI時代における神道・神職のあり方を説く奈良女子大学の才脇先生をそれぞれお招きしました。更に、実務的な観点から「SNS活用や著作権等の留意点」を解説する神社庁参事にお話をいただきます。

技術的な「仕組み」、神道的な「倫理」、そして実務上の「ルール」これらをバランスよく学ぶことで、ITに不慣れな方でも、AIを恐れることなく、また過信することなく、自社に合わせた活用する視点を養いますので是非ご参加ください。

講 師 中村忠之先生(ミツイワ株式会社)

才脇直樹先生(奈良女子大学教授)

武田 淳先生(埼玉県神社庁参事)

申 込 三月一日(日)締切

※支部事務局宛にお申込み下さい。

第七十二回伊勢神宮新穀感謝祭 「埼玉県神社庁参宮団」報告

茂木貞佳

伊勢神宮崇敬会が主催する伊勢神宮新穀感謝祭に併せ、本年度も埼玉県神社庁参宮団を結成し、お伊勢参りの旅が実施された。新穀感謝祭は、五穀をはじめとする食物の恵みに感謝の祈りを捧げると共に、農林水産業の発展に功績ある方の顕彰が行われているものである。

本事業は氏子崇敬者を対象に、神宮及び第六十三回神宮式年遷宮の啓発、神宮大麻・暦の増頒布と家庭祭祀の振興を目的として、継続的な取り組みが期待されている。一般募集での企画は二回目であり、昨年度は二十四名参加、今回は県内外より十代から七十代の男女四十三名(総代・氏子崇敬者三十三名)の参加を得て、十一月二十四・二十五日に行われた。

日程は通常埼玉県として指定の参列日(例年十二月上旬)があるものの、参加勧奨をする神職自身も比較的参加し易いと考えられる十一月下旬にて調整し、伊勢神宮崇敬会のご配慮により実現した。尚、この変更に伴い神宮会館で行われる式典への参列はなくなるものの、神宮における両宮の御垣内特別参拝や御神楽奉納は変わりなく執り行われ、神宮徴古館・農業館・美術館などの文化施設を無償で拝観させていただくこともできた。

移動については、東京駅から名古屋駅間は新幹線を利用し、名古屋駅から伊勢市内の移動は大型バスを利用した。参加者の半数は

六十代から七十代であったが、体力的な負担が少なく、ありがたいとの声があった。休憩時間も十分にあることや、バスガイドによる地域の歴史や文化の解説もあり、また伊勢地方の名物料理を味わう機会など、観光要素も多く好評であった。

宿泊は旅館ではなくホテルのシングル利用にて一名でも参加し易くなっており、また三日間の旅程は難しいという方向けに、一泊二日の需要があることを期待したい。

今回は、初めてお伊勢参りをする方、再訪の方、一人で、家族で、夫婦で、友人やグループでと、様々な立場から参加をいただき、全体の満足度のアンケートでは概ね好評を得られた。

今後は式年遷宮の進捗と共に神宮への関心が更に高まることが予想される。より多くの方が楽しく、清々しいお伊勢参りを体験できるように、企画の改善を重ねつつ、本事業が各支部や神社における参宮団結成のきっかけとなることを願う。

行程概要

【一日目】東京駅―名古屋駅(集合)―二見興玉神社浜参宮(正式参拝)―ホテルルートイン伊勢―夕食(伊勢大阪屋)

【二日目】外宮特別参拝―内宮特別参拝・御神楽―昼食(岩戸屋)―おはらい町散策―神宮文化施設参観―名古屋駅(解散)―東京駅

農事関係係功労者顕彰

入間東支部

原田晴男殿
(神社庁主事)

埼玉県神社庁新嘗祭

新嘗祭が十二月十八日午後一時三十分より神宮にて斎行された。入間東支部の奉仕にて、仲富祥則支部長が斎主を務め、高麗文康庁長、大野隆司県神社総代会会長が参列者を代表して玉串を奉りて拝礼、参列の役職員十三名が合わせて列拝し、五穀豊穡への感謝の祈りが捧げられた。祭典終了後は午後三時より役員会が開催された。

新嘗祭次第

時刻、参列者所定の座に著く 是より先手水の儀あり
時刻、斎主以下祭員、参列者代表参進 是より先手水の儀あり
次に斎主以下祭員、参列者代表所定の座に著く
次に修祓
次に斎主一拝
次に斎主御扉を開き畢りて側に候す
次に祭員神饌を供す
次に斎主祝詞を奏す
次に斎主玉串を奉りて拝礼
次に参列者玉串を奉りて拝礼
一、埼玉県神社庁代表 神職列拝
一、埼玉県神社氏子総代表 総代列拝
次に祭員神饌を撤す
次に斎主御扉を閉じ畢りて本座に復す
次に斎主一拝
次に直会

【奉仕員】

斎主	坂戸神社	宮司	仲富	祥則
祭員	熊野神社	宮司	岡本	行雄
祭員	榛名神社	宮司	鈴木	美徳
祭員	川越八幡神社	宮司	榊原	祥光
祭員	長宮氷川神社	宮司	星野	倫啓

[illegible]

梅
林
正
樹

開催に先立つ三月一日より恒例となりました「埼玉の神社 御朱印展」を行います。会場の西参集殿で県内神社の御朱印及び御朱印帳を一ヶ月にわたり展示します。

当日のクラブツーリズム共催事業「神社DAY」では、武田淳瑋玉県神社庁参事の「神道入門講座」をはじめ、古事記学会理事の寺田恵子先生による「古事記・日本書紀の神話」、神職でライターの小川一代先生による「元伊勢・倭姫命を訪ねて 今、受け継ぎたいやまとごころ」と題する講演を呉竹荘にて予定しています。これらは例年満席となる人気の講座です。

このほか、社務所二階では御朱印帳作り、祓詞浄書体験、篆刻体験教室などの体験事業を計画しています。御朱印展を開催中の西参集殿には「氏神検索」コーナーを設置します。

境内の神楽殿では雅楽や神楽舞、県内神社宮司による神話講談、声優中山さら氏による神話読み語りなどが行われます。毎年の氷川神社職員による境内案内も好評です。

チラシや神社庁ホームページにて詳細をご案内しておりますのでご確認いただき、ご来場下さい。

(教化委員會教化広報部班長)

本宗奉賛事業 埼玉東支部報告

馬場 裕一

この度、当支部では「歴史に学ぶ埼玉からのお伊勢参り展―岩槻で感じる伊勢のこころ―」を十月五日にさいたま市岩槻区宮町鎮座の久伊豆神社(馬場裕彦宮司)を会場に開催した。この企画展示は後援としてさいたま市・さいたま市岩槻区・伊勢市・さいたま市教育委員会・さいたま観光国際協会・伊勢市観光協会・さいたま商工会議所・さらに資料提供として埼玉県立歴史と民俗の博物館の協力を得てのものである。

九月二十七日から十月五日までは、伊勢の神宮に関する写真展を行った。十月五日の境内全体は次のとおりである。

- ①神宮写真展 ②文化財展示
 - ③雅楽演奏会 ④木遣り唄の披露
 - ⑤講演 ⑥境内ツアー
 - ⑦装束着付け体験 ⑧人形づくり体験
 - ⑨火鑽り体験 ⑩伊勢うどん・伊勢茶の振舞い
 - ⑪伊勢名物無料頒布 ⑫三重テラスの出店
 - ⑬神宮大麻暦頒布始祭
- ①神宮写真展は、神道青年全国協議会が作成した写真およびタペストリーを借用し、さらには神宮司庁の協力のもと埼玉県神社庁が作成した写真も展示した。現代における神宮の四季折々の美しい風景や年中祭祀、神宮

式年遷宮の様子を示すことができた。

②文化財展示では、埼玉県立歴史と民俗の博物館寄託平野家文書「天保十年伊勢道中日記覚」を展示するとともに、本書の翻刻を掲載する『埼玉県の伊勢講』をもとに神青協一都七県協議会が作成した横幅約四メートル高さ約二メートルの地図パネルを展示した。この日記は岩槻の有力商人で構成される伊勢講の日記である。道順や道中の茶代だけでなく各地で見聞したことや感想、大掛かりな太々神楽の様子まで細かく記載されている。講中が建立した燈籠が会場神社境内に現存していることもまた興味深い。

そして、会場の久伊豆神社に現存する明治二十九年、三十三年のお伊勢参りに関する資料二十点を展示するとともに、近隣の岩槻区、越谷市、宮代町の神社に残る絵馬、三重県伊勢市の二軒茶屋餅本店に伝わる埼玉県の伊勢講が残した「大々御神楽」の扁額等(いずれも江戸から昭和のもの)を展示した。この資料からは、事前準備段階、道中、帰郷後の伊勢講の様子を見て取ることができ、こちらも講中が建立した燈籠や石碑を境内に見ることができ。本文化財展示では、身近な氏神様で感じることのできる郷土と伊勢との古く

からのつながりを示すことができた。

③雅楽演奏会では、神宮神楽殿でも奉奏される「舞楽陵王」を身近な氏神様で鑑賞するとともに、雅楽の説明や楽器に触れることを通して伝統文化を体験できる機会を提供した。

④木遣り唄は、神宮式年遷宮に際して地元住民が行うお木曳で唄われる伝統的な掛け声で、令和七年より始まった第六十三回神宮式年遷宮においても行われている。今回は、約三十年前に神宮奉仕会青年部から教授いただいた木遣り唄を今日まで継承している越谷市木遣保存会に披露していただいた。神宮式年遷宮に関する伊勢の貴重な民俗文化を体験できる機会となった。

⑤講演は、小林威朗越谷久伊豆神社禰宜により「埼玉からのお伊勢参り」という演題で行われた。伊勢御師の活動を中心にお伊勢参りの全体像を伝えるとともに、埼玉と伊勢との関わりの深さを一般の人に分かりやすく伝えるものとなった。午前午後の二回講演で、それぞれ三十名程度が参加した。

⑥境内ツアーでは、午前午後の二回、境内に残る燈籠や石碑などの伊勢講に関する文化財の紹介を行った。それぞれ三十名程度の参加で、約四十分間解説した。

⑦装束着付け体験では、神職が大祭で着用する衣冠を一般参加者に着用してもらう体験を行った。神宮式年遷宮でも用いる衣冠を著装することは、服装の面からお伊勢参り

や神宮式年遷宮の文化に興味関心を持つ機会となるとともに、我が国の伝統文化への理解を深めることが出来た。

⑧人形づくり体験では、地場産業である地元岩槻の人形づくり体験を行った。

⑨火鑽体験は、神宮では毎朝火鑽具を用いて忌火を鑽り出し、神饌調理を行っている伝統に則り、会場でも同様に火鑽具を用いての火起こし体験を行った。

⑩伊勢うどん・伊勢茶の振舞いでは、楽しんでお伊勢参り文化を体験する企画となった。伊勢うどんは約五百食を振舞った。

⑪伊勢名物無料頒布では、アンケートへの回答を条件に伊勢の名物である神代餅・岩戸餅・虎屋ういろ・角屋ビールを無料頒布した。埼玉にいながらお伊勢さんを感じられる企画で、多くの人が喜んで手に取り、約四百個を頒布することが出来た。伊勢への興味関心を持つ一つの契機になればと思う。

⑫三重テラスの店は、日本橋にある三重県のアンテナショップに出張出店していた。本展で伊勢に興味をもったら伊勢のものが欲しくなるのが人情と思い依頼した。概ね好評だった。

⑬神宮大麻暦頒布始祭は、日程の都合で当日に行くことになった。今回は、参加者の目に見える形で行うことで厳粛な祭典を体感し、神宮への信仰文化への理解を深めることが出来たと考える。

雅楽や装束の着付け体験、木遣り唄の披露などを行ったメインステージでは、神職で

シンガーソングライターの壮紫さんが司会進行を務め、参加者から出た神社に関する疑問質問への回答や合間に歌を披露するなど賑やかで親しみやすい進行が行われた。近隣市町の文化財担当者(埼玉県立歴史と民俗の博物館・さいたま市立岩槻人形博物館・さいたま市立岩槻郷土資料館等)の来場もあり、概ね好評を得た。

当日の来場者数は千五十二名であった。その内四百二名よりアンケートを回答いただいた。その分析としては、大まかに以下のことが読み取れる。①来場者の約六割が岩槻区在住②来場者の男女比は約四・六③来場者の年齢層は多いものとして、五十代約二十四・四十年代約十九・三十年代約十七%であった。④来場者の約六十六%が家族連れであった。⑤来場者の約八割が普段から会場神社に参拝する一方で、約二割は本展を機に初めて来社した。⑥告知に有力な媒体はポスター・チラシであり、SNSやインターネットで知った人との比は約五・二であった(複数回答可)。⑦特に良かった展示としては、伊勢うどん・伊勢茶の振舞い(二六九)、神宮写真展(一八九)、雅楽演奏会(一六九)と続いた(複数回答可)。⑧来場者の満足度は約九十八%であった(大満足約五十一%、満足約四十七%)。⑨本展を通して約九十八・五%の人が神宮に関心を持った。⑩約四十三%の人が自宅に神棚を祀っており、約三十%の人が神宮大麻を祀っている。また、約三十七%の人が地域の神社

(氏神さま)で神宮大麻を頒布していることを認知している。特筆すべきは来場者の年齢層で、他会場で行った神宮写真展では五十・六十代が多い結果となるが、本展では三十・四十代が比較的多く、特に三十代は約十七%おり(令和四年約十%、令和五年約十%)、アンケートに答えられない子供も相当数来場したため若者の文化理解を促す企画となったことが分かる。さいたま市教育委員会の後援を得て近隣の小中学校へチラシを配布した効果があつたとともに、SNSの普及も一因と考える。

本展は、岩槻で初めて神社関係文化財を用いてお伊勢参りについての展示を行った。文化財展示を主として、講演、境内ツアーで具体的に郷土の歴史・文化を伝えるとともに、上述のようにお伊勢参りを内容とした様々な方法を用い、多くの人に広く伝統文化に関心を持つてもらえる企画となった。

一方、文化財展示と講演の場所が分かりにくかった点、タイムスケジュールが分かりにくかった点、市報や岩槻区内にポスティングされるタウン誌への掲載が出来なかった点は反省点として次年度に引き継ぎたい。

今後も、歴史的民俗的価値のある展示を展開しつつ、郷土と伊勢、氏神社と神宮という関係性を示していくことで、郷土に対する理解と愛着を育む一助となることを願いつつ、さいたま市の生涯学習の振興に寄与していく所存である。



木遣り唄



蘭陵王



神宮大麻暦頒布始奉告祭



当日の様子



講演の様子



神宮大麻の受渡



人形づくり体験



装束着付け体験



火鑽体験



境内ツアー



文化財展示の様子



文化財展示「江戸時代の道中日記」



伊勢うどん



文化財展示「お伊勢参り地図パネル」



神宮写真展